高知県立坂本龍馬記念館だより 2010(平成22)年10月 第75号

高知県立坂本龍馬記念館 The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛鳥

ひとう

海援隊旗(二曳きの旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

気宇 KIU SOUDAI 壮大

共通する〝不安〟・幕末と現代 生きるヒント探ろう

企画展「風になった龍馬 VOL2 ―時代の力―」

2010年10月9日(土)～2011年1月10日(月)

来年開館20周年の節目を迎える坂本龍馬記念館の、メイン企画は3年越しの「風になった龍馬」展である。今年はその2年目。テーマは「時代の力」。大河ドラマ「龍馬伝」もいよいよ終盤、館の入館者の勢いは止まらない。龍馬はまさしく〝風〟になって日本国中駆け巡っている。幕末のあの時代、時代を動かす〝力〟となったのは「船」であった。龍馬も海舟も万次郎、しかりである。そして今、混乱の平成に生きる子孫たちが思う現代の「船」とは?そして「船」の行く先は?

泰平をむさぼる日本の心胆を寒からしめたのは「船」、四隻の軍艦であった。

1853年、アメリカ、ペリーの来航である。それが、幕末の号砲となった。武家社会を根底から揺さぶる新しい時代へのそれは身震いとも言えよう。大型船の建造ラッシュが起きた。動かす人のそれぞれの思いを船が運んだ。

海舟の船と言えば「咸臨丸」。日本が初めて自前で調達したスクリュー装備の軍艦である。遣米使節団の護衛艦として使用した。万次郎の船は、これはもう漂流中を救出されたアメリカの「ジョン・ハウランド号」に尽きる。万次郎の人生の振り出しである。龍馬は船が多い。が、あえて一隻と言うなら亀山社中の「いろは丸」ということになろうか。

3人とも「船」は違っている。船そのものの形も、使用目的も異なる。それぞれの船上で考えたことを時代に照らし合わせて想像する。「咸臨丸」では海舟と万次郎が同船している。海舟と龍馬が同船したのは「順動丸」だ。文久3年1月、兵庫から江戸に向かう途中、悪天候で下田に停泊、たまたま、土佐の山内容堂と出会い海舟と容堂の会見で龍馬の脱藩が許される話は有名である。

船中八策を起草した「夕顔」。「ユニオン号」と言えば薩長同盟が浮かび、「ワイルウエフ号」の悲劇と続く。新婚旅行は「三邦丸」・・・龍馬が絡む船は数多い。

船酔いに悩まされていたとの逸話の残される艦長、海舟。捕鯨船で世界を7周したと言われる万次郎、そして龍馬だ。3人がすれ違った幕末最後の5年間に日本は明治維新、新時代へと動く。現実に、乗った船は違っていたが実は3人は大きな〝時代の船〟に同船し同じ目的地を目指していたのである。

歴史は動いている。揺れている。殺伐混乱のあの時代の「船」に代わるものは何か?今、「時代の力」を考えたい。

前田 由紀枝

関連行事

■特別講演会・子孫は語る『ブルック大尉と海舟と万次郎』～咸臨丸渡米150周年に語る太平洋横断秘話～ジョージ・M・ブルック氏、北代淳二氏 10月10日(日) 13:00～15:00 (高知会館)

■「桂浜 田中泯踊る!～龍馬の風にふかれて」 10月31日(日) 17:00～18:30(桂浜)

■『風になった龍馬～時代の力』第1部シンポジウム・子孫は語る 坂本登氏、高山みな子氏、中濱京氏、ほか▽第2部大河ドラマ『龍馬伝』パブリック・ビューイング～ツイッターたちと大スクリーン鑑賞▽第3部トークセッション『未来へ発進!』11月14日(日) 18:45～21:45(高知市民プラザかるぽーと) ＝いずれも無料＝

ずらり新資料　内容充実　見せ方に課題残る
「薩長同盟を陰で支えた男たち」展

本展では、まず薩長同盟の成立過程をパネルで説明した。通常、薩長同盟は龍馬が考え出したかのように描かれることが多い。しかし、実際には太宰府に流された五人の公卿を中心として生まれた案なので、展示では、五卿が太宰府へ流される契機となった文久三年八月十八日の政変から取り上げた。また、龍馬が薩長同盟に関わる前から薩長同盟に尽力していた筑前藩の勤王志士や、土佐脱藩浪士の土方久元らにもスポットを当てた。これによって歴史には流れがあり、一つの大きな仕事も様々な人が関わって成し遂げられるということを知っていただけたと思う。その反面、八月十八日の政変や禁門の変、幕長戦争などの事件が絡み合い、複雑になったため、しっかりと読まないと理解しにくい展示になってしまった。

京都土佐藩邸資料　岡田以蔵の罪状文も

関連する資料は、昨年十二月に県が購入した五七四点の京都土佐藩邸資料を中心。初めて展示した京都土佐藩邸資料は、藩の目付方（探索方）が収集した情報が記されており、興味深いものばかりだ。

この資料群の中で最も注目された資料は、全国でも大きな話題となった寺田屋事件関係資料で、これは薩長同盟直後に、寺田屋で龍馬らを襲った伏見奉行所が、京都所司代に出した報告書である。

龍馬捕縛には失敗したが、龍馬から書類を押収したことが報告されている。長文の報告書を翻刻し、現代語訳や解説を付けて展示したため分かり易く、多くの方が熱心に読んでいた。

また、薩長同盟にいち早く尽力していた福岡の勤王党弾圧事件（乙丑の獄）の資料やそれに関連して土佐勤王党弾圧資料（岡田以蔵の罪状文など）、第二次幕長戦争関係資料も展示した。予想外だったのは、以蔵の罪状文。これは目をひくのではないかと思っていたが、反応は薄かった。

京都土佐藩邸資料は、内容は面白いものの、報告書のような文字資料ばかりである。研究者や歴史好きな方にとっては興味深い資料も、一般の来館者には文字資料ばかりだと敬遠される。以蔵の罪状文などは、展示の仕方に工夫が必要だったようだ。特に今年の夏は、『龍馬伝』効果もあって、常に館内は人が多く、多くの文字をゆっくり読むゆとりが無かったことも影響した。

龍馬の手紙草案　後藤象二郎宛のぞく龍馬の平和思想

その他、今年六月に発見された慶応三年（一八六七）十月十三日後藤象二郎宛て龍馬書簡の草案も展示した。企画展開催直前に発見された資料なので、企画段階では当然予定していなかった資料だが、平和的な倒幕を望む龍馬の考えを示す好資料であるため、薩長同盟後の動きを示す資料として見てもらった。

発見時に、新聞やテレビでも大きく取り上げた資料だけに、展示前から「いつから展示されるのか？」という問い合わせが頻繁に来ていた。現存する龍馬書簡の中で最高に重要な資料であるため、私は以前からこの資料の原本が現存していてほしい、と強く願っていた。原本はいまだ行方不明だが、その草案を今回展示できたことは、学芸員として至上の喜びだった。合わせて、原本の複製も二点展示させていただき、草案と原本の比較を行うことによって、龍馬の人柄や考え方をより深く知ることができた。

今回の展示は、新発見の資料が豊富で、充実した展示となった。京都土佐藩邸資料は、まだまだ大変面白い資料が多数含まれているだけに、今後大いに展示に活用していくつもりである。そのためには、一般の方でも面白さが感じ取れるような工夫をしなければならない、と本展を通じて強く感じた。三浦　夏樹

海を満喫！〝陸酔い〟も体験
頼もしい若者たち
「われら海援隊！」スタッフ乗船記

6月と7月の2回に渡って開催した「風になった龍馬」の関連イベント、高校生洋上セミナー「われら海援隊！」が無事終わった。海援隊長の前田由紀枝さん（坂本龍馬記念館学芸主任）を先頭に、総勢40名の海援隊士と10人近くの熱心な講師の先生方が「土佐海援丸」乗り込み、一泊二日、全員で船の中の共同生活を送った。私は2回目の航海に参加。無事高知港―土佐清水往復の洋上セミナーを終了した。もちろん学生と一緒に500トンクラスの船に乗るのなどは初めての経験であった。

私はどうしても手薄になるという食事係を担当した。お皿洗いから、配膳作業に汗を流した。食器を洗っていると「何か手伝うことはありませんか？」「年齢はおいくつなんですか？」などと学生さんの方から声をかけてきてくれて、とても嬉しく思った。第1回目の航海はあいにく天気荒れ模様で、港に戻っての船中一泊だったとのことだが、第2回目の海は全く逆の無風ベタ凪状態だった。沖合30キロ、まるで延々と続く鏡のような海面にニタリ　クジラの姿が見えると歓声が上がった。続いてバンドウイルカの群れである。海面に白い筋を曳きながら泳ぐ姿に暑さも忘れた。停泊する夜の海援丸は勇ましい昼の表情とは違い、穏やかさに満ちている。ライトアップされたデッキではしゃぐ高校生たち、笑顔で駆け回るスタッフの先生方と声をかけあう瞬間、〝船〟が紡ぐ〝絆〟を実感する。

土佐清水に着岸後、「くろしお社中」で行ったセミナーはすばらしかった。

船（ship）の生活はリーダーシップ、フォローシップ、そしてフォロアーシップで成り立っていると教えてくれたのは、海援隊副隊長の宮茂啓司さん（高知県立高知海洋高等学校副校長）。そして同じく副隊長の前島正二さん（高知県教育委員会生涯学習課　主任社会教育主事）は、

「どんな困難な夢も実現するためにある、夢をかなえるために大切なことは仲間作りのためのコミュニケーション、いろいろな気づきが大切だ」と話した。「無理だ、駄目だと思った時点で頭の中はストップする。だから、とにかく陽転思考でいてください。もう駄目だと思っても、そのつど乗り越えていくこと」。

これらの言葉は高校生たちだけではなく、私たちにとっても勇気を与えてくれたと思う。

それにしてもセミナー終了後、私は困った事態になった。どういうわけか地面が大揺れしている気がする。めまいがして、まっすぐ立っていられないのだ。周囲を見ると同じ症状の人が続出している。これは「陸酔い（おかよい）」といって、立派な船酔い状態なのだと教えられ、大いに驚いたものだった。まさか船を降りてから〝酔い止め薬〟を飲むことになろうとは！。

参加した高校生たちは元気だった。そして底抜けに明るかった。彼らは豊かな〝未来〟と、そして「われら海援隊！」を通じて〝自分の夢を叶える〟ための仲間と、貴重なレクチャーに恵まれている。私が高校生の頃はどうだったのだろう、と、ふと思う。「夢」や「将来」について考えることもなく、ただ無為に過ごしてきた気がして恥ずかしい。

年甲斐もなく「なんの、高校生に負けてはおれんちや！」という気持ちになるから楽しいものだ。

この高校生たちの中から、今後さまざまな舞台を経て、来年はアメリカ・フォーラムに出て行く代表が決まる。彼らがどんな活躍をしてくれるのか、今から本当に楽しみだ。

渡辺　瑠海

「鍔は知っている！」③

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会　現代龍馬学会
小島一男

前回までのあらすじ

「山内家の家宝にしよう」と主人豊資公の意を受けた中西武五郎は、鍔の名品信家を貰い受けに道具屋「観山堂」で知り合った旗本、中村寛太夫宅を訪ねた。そして、首尾よく寛太夫から信家の「一心不乱に」の鍔を譲られたのである。その際、武五郎は寛太夫から家宝の「探幽の桜」を床の間に掛けての手厚い接待を受けた。その接待振りなど豊資公に報告した。

豊資公の喜び

「そうか『探幽の桜』に教えられたのか。いかにか名画であろうのう。それにしても中村寛太夫と申す者、あっぱれな武士じゃ」

言いながら豊資公は信家の鍔を手に取り「なるほど、これは結構な信家じゃ」と感嘆の声を上げた。

「でかしたぞ、武五郎。これこそわが山内家にふさわしき鍔、まさしく天が与えたもうた信家じゃ。余はうれしい。余の言わんとしていること分かるな、武五郎よ」

「ハハッー」

「申してみよ、武五郎！」

「それは、このような意匠が隠されてございます」

武五郎は次のように豊資公に説明した。

一心不乱にの信家鍔の意匠

1　鍔の形

変り木瓜形であるが下部の一弁を二山にし、五弁の花を表しここでは「梅」と「桜」を表現している。

2　小透かし

①　櫃孔の「瓢箪」は「酒器」をあらわし、ここでは代々こよなく酒を愛したと言われる「山内家」と解釈する

②　小透かしとした斧は深い意匠があり、ここでは「盆栽の鉢の木を切った斧」を表現している。

3　鍔地に施された毛彫りと彫り

①　毛彫りの唐草は地模様として、鍔地に変化をつけているが、ここでは切れ目なき「未来永劫」を表す。

②　彫り物の沢瀉は湿地の浅瀬に自生する植物で、別名を将軍草と言い、ここでは「徳川将軍家」を表す。

4　「一心不乱に」はその文字の表す通りである。

これらの意味を考えると、次の解釈となる。

鍔形の「梅」「桜」に小透かしの「斧」で謡曲「鉢の木」を意味し「邪心なき清雅な忠誠心」を表す。

「つまりこうです。『我が山内家は徳川将軍家に対して、未来永劫邪心なき清雅な忠誠心をもって〝一心不乱に〟仕えます』と読めるのです」。武五郎は答えた。

「ウムーあっぱれである武五郎」

豊資公は満足そうに頷いた。

武五郎はすっかり面目を施し自室に下がった。そして武五郎はこの日のことを生涯忘れることはなかったのである。

その時代将軍家に対して忠誠心は一大名として、しごく当たり前のことではあったが、特に山内家では七代豊常が15歳で、また十一代豊興が17歳で家督を継いだ後急逝。この時、八代豊敷（とよのぶ）と十二代豊資は、幕府の特別の恩情をもって家督相続を許されたいきさつがあったのだ。「一心不乱にの信家」を手にした時、豊資公と中西武五郎は、信家の鍔作りの技量の素晴らしさはもちろんのこと、その意匠をすべて理解して喜んだのであった。

喜びは、その後土佐24万石の格式を重んじ、一方、中村寛太夫の潔さを称え、黄金75枚と酒、肴をもって礼としてあらわした。

三「一心不乱にの宗義」

御家安泰の願い

この話を思い出すまでもなく、宗義はこの鍔を一鎚入魂、御家安泰を願い製作したものである。

十五代豊信公（容堂）自身も十四代豊惇公（豊資四男）が家督を継いだ直後26歳で急逝し、幕府や老中阿部正弘等の温情を受け、伯父である豊資の推薦もあり、幼い豊範公（豊資十一男、現十六代当主）の後見人を兼ね家督を継いだあの嘉永元年（1848）十二月二十七日の感激を忘れなかった。このように御家断絶の危機が何度もあったのだ。その思いは生涯「公武御一和天下泰平之基」との佐幕派理念をくずさなかったことでも知れる。

土佐藩は「朝に勤王、夕べに左幕」と陰口をたたかれるほど、藩の方針が定まらなかった。その藩政の陰には、江戸や京都の土佐屋敷に配した探索型の情報を基に、時勢を掌握し、嘉永三年九月十一日には転法輪大納言実万卿の姫を豊信の室に迎え、公家との縁を深め、佐幕傾向の強かった吉田東洋を藩の執政として登用し『公武合体派』である豊信を「佐幕派」に仕立て、その一方で文久二年十二月に勤王である毛利の松平大膳太夫慶親の姫を豊範の室に迎え「勤王派」にと仕立て「桜田門外の変」や「禁門の変」等、大きな政変のあるごとに、両者を使い分けた人物の姿が、見え隠れする。それは、景翁と呼ばれ隠居して20年、七十三歳になった今でも常に、政治力を失うことのなかった十二代豊資である。藩祖一豊公以来、「一党に偏ることなかれ」との藩祖を守り、山内家の存続を第一に考えた結果であろう。

容堂公の御側小姓（秋山久作）

豊信は家督とともにこの信家鍔を相続し、座右の銘として大切にした。そして、幕府が弱体化した今だからこそ、新たに「一心不乱に」の鍔を藩工宗義に写させ、世に、また家臣にその思いを示そうとしたものであろう。

そこまで考えると宗義はまた、御天守に向かって「景翁様、御隠居様、太守様」とつぶやいて再度ふかぶかと礼をし、その苦労を思い涙ぐんだ。

やがて、彼は涙をぬぐい、供の宗長の方を向いた。深い皺をさらに深くした微笑み顔で「実は、あの秋山様の坊ちゃまがの・・・」と話しかけた。宗義にはその日城中でもう一つうれしいことがあったらしい。

「御隠居様の御言葉である。心して聞くように・・・」

「ハハハー

「明珍紀宗義『一心不乱に』の鍔、見事である。名工信家にくらべても遜色なしじゃ。さすが藩工、あっぱれである」

この容堂公のお褒めの言葉を宗義に伝えたのは、容堂公の側小姓を勤める秋山久作であった。久作は平伏する宗義の側に寄り「久しいのう、伊六の爺やん。頭はちっくと白うになったけんど、腕のほうは落ちちょらんのう。御隠居様もこじゃんと御喜びじゃったき、この久作もうれしかったぜよ」と手を握ったばかりでなく「まっことよう出来ちゅうぜよ。あの鍔は」と涙ぐんだものである。

秋山久作はかの中西竹五郎の血縁である。その久作少年が、母、「ます」に連れられて水道町にあった宗義の鍛錬場を初めて訪れたのはまだ十一、三歳の頃であったろうか。ちょうど、宗義が良次（宗長）を宮崎家より養子に迎えた頃と重なる。久作が礼儀正しい少年であったこと、そして、中西武五郎の血を受け継いでいたのだろう鍔好きでよく、宗義や良次の仕事を飽きもせずに見ていた。また、武五郎の「一心不乱にの信家」鍔の話にはいつも目を輝かせて聞き入っていた、そんな記憶が頭の奥にある。久作少年は城下でも五本の指に入る秀才で合った。十五歳になるころにはすでに「一心不乱にの信家」について、彼なりの持論も持っていて大人たちを驚かせた。

まるで武五郎の生まれ代わりのような態度で宗義と良次に語った。

「今は、我が山内の宝物である鍔が・・・・」

と始まり「この鍔誕生の秘密、歴史的背景は・・」と本題に入っていく。

「『一心不乱にの信家』鍔は、珍しく鍔形を変わり木瓜形とし五弁の花（梅・桜）を表現している。切羽台左中央に切る銘も、この信家は、切羽台右肩に切っている。また意匠も単なる『鉢の木』でなく、唐草（未来永劫）、沢瀉（将軍）、櫃孔の瓢箪『一心不乱に』の文字など、複数の意匠が暗号のように組み込まれ『将軍家への忠誠心』を表していること、信家作中の傑作であることなどから考えて、大名級の相当に身分の高い者が、特別に注文した鍔であることが分かります」

言葉によどみない。話は続く。「次は将軍家がどなたか考えてみましょう」

「慶長八年（1603）徳川家康公が初代将軍に任じられし時、福島正則が献上したのであろうか。信家の製作年代を考えるとどうだろう。もしそうだとしても、将軍家の御倉深く秘蔵されているはず。では、織田信長か？いや、信長は天下をとっていない。天下を取ったのは豊臣秀吉だ。しかし、秀吉は藤原氏の出身とされ関白位には任じられても将軍にはならなかった」（当時、源氏の出身でなければ、将軍位には任じられないとの約束ごとがあった）

「すると、やはり足利将軍家か。そうだ、永禄十一年（1568）織田信長が足利義昭を奉じ上洛、足利将軍家十五代に任じらし時、その忠誠心の証として献上したか？いや、忠誠心といえば、元々足利将軍と縁が深かった細川義孝か？そうだ、明智光秀かも知れん。いや、鍔の櫃孔の瓢箪は豊臣秀吉馬印か？秀吉は京都所司代として義昭の近辺にいた。しかし、信長を差し置いて秀吉が足利将軍家に忠誠心を示すはずがない。危険な橋だ、秀吉が渡るとはかんがえられない」自問自答の解説を続けた後に、いよいよ核心へ。

「やはりこうだ。織田信長が名工の名をほしいままにしていた信家に特別注文し、十五代将軍足利義昭の不信感を取り除こうとしたものだろう。『将軍家に未来永劫、邪心なき忠誠心を持って一心不乱に仕えます』と深い暗号を込めて『一心不乱にの信家』を献上したものと考えるのが妥当でしょう」

見事に結論つけた。

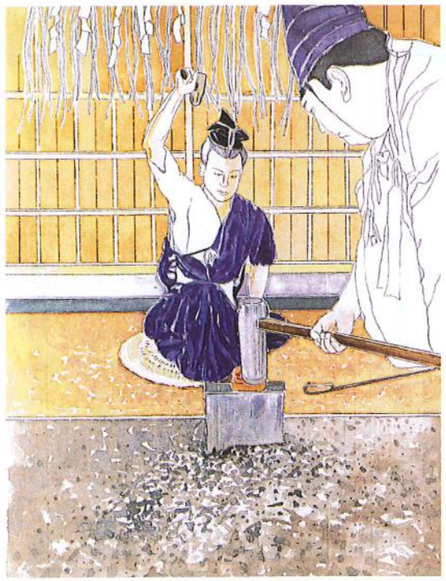
久作はこの持論を生涯もち続けた。後には山内容堂もこれを信じていたし、この信家を宗義に模写させるように進言したのも久作であった。

早くに父萬次をなくした久作は十七歳で元服、秋山家を継いで御馬廻り役として出仕した。

十九歳で優秀さを認められ、容堂公のお小姓を命ぜられ江戸へ、それを聞いた宗義はわがことのように喜んだものであった。

この秋山久作は、明治、大正を通じ日本を代表する鍔の研究家となるのだが、宗義はそれを知らない。

（次回に続く）



（画）和田 通博

参考

江戸時代、大名家の正装用刀装小道具は「後藤家」（御家彫り）を使用、登城用は赤銅磨地の鍔を使用とか、一部約束ごとはあったが比較的自由だったようだ。「鍔」は「掌中に小宇宙あり」と言われるほど、数々の画題があり、裕福な町人は勢を尽くした「金工鍔」を好み多くの名工を輩出した。（これらの金工を「町彫り」という）

また、この時代の心ある武士は、床の間の掛け軸のように四季に応じて鍔を掛け替える風流さをもって品格を高め、その教養を表した。中西武五郎や中村寛太夫が桜の鍔を掛けていたのは、そのためである。

謡曲「鉢の木」について

鎌倉幕府の執権北条時頼は隠居したあと、僧形となり諸国を行脚、冬の最中に雪降る下野國佐野の荘、佐野源左衛門の屋敷に宿した。ところが源左衛門は貧しく、囲炉裏に焚く薪さえなかった。ついに源左衛門は秘蔵の「梅」「松」「桜」の盆栽の鉢の木を斧で切り僧に暖をとらせ、栗ご飯でもてなした。僧は厚く礼を述べて帰って行った。鎌倉に帰った時頼は「いざ、鎌倉！」の号令を発した。諸国より馳せ参じた武将の中に、佐野源左衛門を見出した時頼は、源左衛門の清雅さと忠誠心を誉め、押収されていた旧領を回復した。それと同時に一夜のお礼に、鉢の木の梅、松、桜にちなみ「加賀国梅田」「上野国松井田」「越中国桜井」の領地をあたえ、武将の範とした。

そこで「斧」と「梅・松・桜」のいずれかをもって、この故事を表すようになった。また「斧」の代わりに「雪」と「栗」で表現することもある。

拝啓 龍馬 殿

6月21日～9月20日

178通

人生4回目です。あと1回は来る

（6月23日　岡山　H・S　63歳　男性）

貴男の足跡をほんの少しだけでも知りたくて、北の大地北海道からはるばる訪ねて来ました。記念館から見る海は広くて大きくて、どこにでも行けそうな大海原が続いていますね。ちっぽけな悩みなど吹き飛び、大きな夢を持つことの出来るような気がします。ほんとうに来てよかったと思います。また、涼風の吹く頃に訪ねたいものです。

（7月17日　北海道　北国のおばあちゃん　74歳）

坂本龍馬を知るために孫たちを連れて来ました。太平洋の波の音を聞きながら育った大きな心と、太平洋のその向こうに何かあると思われたのだと思う。小さい時の環境が大きな心に育てたのだと思われます。又、いい奥様、男気の奥さん、小さいことにくよくよしない夫婦共にすごいと思った。よい勉強ができました。大きい心でかたよらない心で今から生活していきます。

（7月30日　愛媛　T・S　75歳　女性）

ぼくは龍馬さんが好きです。大河ドラマも見ます。家の本だなの半分は、龍馬さんの本です。ぼくは龍馬のやること（行動）や生き方が好きです。りょうまさんにあいたいです。

（8月8日　神奈川　J・A　11歳　男子）

家族で念願の桂浜に来れて感無量です。10才の息子の桂浜の太平洋が見たいとの熱望に押されて九州から来ました。龍馬記念館で数々の龍馬の思いに触れ、真剣な生き様に、時をこえて感動でいっぱいでした。一人の人間として何を志し、何の為に生きるか、改めて自分自身の生き方を考え、決意する機会となりました。家族一人一人が人としての生き方を考えることができ、これからの人生の大きな節目とすることができました。本当にありがとうございました。

（8月9日　福岡　K・Y　42歳　女性）

ぼくは龍馬の本を読み、この高知に来ました。高知に来て龍馬のなしとげたことがすごいなぁとあらためて実感しました。桂浜でも銅ぞうがあり、高知の人たちにもあいされているんだなぁと思いました。龍馬さんにゆうきをもらったのでいろいろなものにちょうせんしていこうと思います！

（8月9日　福岡　T・Y　10歳　男子）

今日初めて土佐に来ました。念願叶って、桂浜に立ってみて龍馬さんもここから見たのかななんてしみじみと思ってしまいました。海はいろんな所で見てきましたが、なぜだか土佐の海は広く大きく見えました。今は簡単に海外に行ける時代になりましたが、ここからの跳めを見ていると、海を渡ってみたいという気持ちが自然とわいてきました。龍馬さんもきっとこんな気持ちだったんでしょうね。遠いのでなかなか来れませんがぜひまた来たいと思います。

（8月11日　京都　S・E　19歳　女性）

ぼくはえど（東京）からきました。図書館でいつも本を読んでます。龍馬さんはすごいです。また来ます。いま小学校三年です。龍馬さんみたいになりたい！ラグビーがんばります。

（8月11日　東京　S・W　9歳　男子）

自分の進むべき道を忘れないように先生の下で再確認したいと思い訪ねました。

（8月12日　栃木　K・K　42歳　男性）

またこちらを訪れることができました。8年前、新婚旅行で初めて訪れ、今回で2回目です。再び来られたことをうれしく思います。夏の桂浜はきらきらとしてとても美しいですね。これからも2人仲良く龍馬のように楽しく笑って生きていきたいと思います。

（8月15日　静岡　M・N　37歳　女性）

初めまして。私は大河ドラマも見ていなくて、また学校で習ってきた歴史の授業でもガッツリ取り上げられてなかったこともあり、龍馬さん、あなたのことをあまり知りませんでした。でも高知に来たら至る所にあなたがいました。であい博や泊まった旅館、そしてここ記念館。そんな中であなたのことが少しずつわかってきました。人と違ったことをするというのは難しく、勇気が必要です。あの時代に自分の道を信じて強く生きたあなたは素敵です。今の時代の言葉で言うなら「素敵男子」ですね。また会いにきます。今度は3人で。

（8月16日　大阪　R・K　女性）

わいは龍馬はんの生き方尊敬してるねん。行動力はすさまじいと思うわ～。土佐から江戸は遠かったやろなぁ。今日までの滞在3日間で土佐のすばらしさを肌で実感したわぁ～。地図を広げて道を探してると心配して声をかけてくれる人、写真を撮ってくれる人、皆心が温かい人ばかりで人情厚い土地やなぁ～と思う。大阪に帰っても土佐の良さを色んな人に広めようと思うねん。おつかれちゃんぼん。

（8月16日　大阪　D・Y　24歳　男性）

婚前旅行と称して嫁さんと来てから早2年半。大河ブームに流されて（苦笑）、どうしても今年はこちらへ来たいと思い伺いました。このドラマをきっかけに龍馬さんのことを知ってもらえるのであれば素晴らしいことだと思います。ここに来ると、独身時代の青臭く、向こう見ずであった自分を思い出し恥ずかしくなります。でもそんな若者の力こそが、次の時代の原動力になるのかなとも思います。結婚してから少しだけ自分の周りを見渡すことができるようになったと思います。あの青臭く向こう見ずながらも胸に熱いものをもっていた自分も失わずに、今のボクの体の一部を構成しています。ボクの人生、まさに"これから"といった気持ちです。

（8月17日　愛知　Y・M　35歳　男性）

10年前、結婚に悩んでここに来て、龍馬さんから勇気をもらって帰り、結婚を決めました。今は7才の息子と3才の娘に囲まれ幸せです。去年は介護の世界に入るのを悩み、龍馬さんに心の中で相談しました。自分の想いを確かめるため、ヘルパー2級の資格を取り、グループホームへ就職しました。仲間に恵まれ、利用者さんと貴重で楽しい時間を過ごしています。今度は何を相談しに来ることになるでしょうかね。

（8月18日　愛媛　S・T　37歳　女性）

ようやく来ることができました。あなたが生まれ暮らした風景を見ることができ感動しています。行こう行こうと思いながら数年がたち今日になってしまいましたが…これも運命なのではないかと思います。あなたに会い気持ちも新たになりました。必ず弁護士になります。志を立て、信念を持ち、必ず成し遂げます。理不尽なことに涙を流す人が少しでもいなくなるように。見ていてください。今日財布をなくしました…これも運命なのだと思います。

（8月18日　埼玉　H・O　33歳　男性）

いつも大河ドラマ「龍馬伝」を毎週見ています。高知に来たのは初めてで、どこを見ても龍馬だらけですね。昨日ろまん社中に行ってきて龍馬が着た服を着させてもらいました。すごくかっこよかったです。また来年も来ると思いますが、もし来れたらまたここに来ます。

（8月26日　兵庫　D・K　9歳　男子）

一年ぶりの来訪です。今回は次男の友達親子と一緒です。今年はテレビの「龍馬伝」もあり、高知は龍馬一色ですね！ますますファンが増え嬉しい限りです。子どもたちもすくすくと成長し、長男は来年中学生です。まだまだ自分のやりたい事は見つからないようですが、こつこつと前進してほしいです。また来年もまたでお会いしましょうね！

（8月26日　兵庫　N・H　46歳　女性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

今年の夏の入館者数は、これまでにない7月末から33日連続で4桁台という記録的な数字となりました。暑い！熱い！夏が終わり、一息つく間もなく、観光シーズン突入です。そして来年度は開館20年の節目を迎えるにあたり、様々なイベントを計画しています。この「拝啓龍馬殿」の書籍第2弾もこれから編集作業に入ります。これまでにメッセージをお寄せいただいた方には、掲載願いのご連絡をさせていただくこともありますので、ご協力よろしくお願いいたします。　尾﨑　由紀

ここは館長の部屋　森　健志郎

帰ってきた龍馬人形

「館長宛〝ゆうパック〟です」と、職員のNさんからその包みを受け取った時には〝暑中見舞いか、販売依頼の商品だろう〟そんな気持ちであった。手ごろな重さから推察して〝お菓子か、人形か？〟などと無造作に包みを破り開けようとした。ところが思惑手ごわいのである。外装は簡単に外れた。本体はビニール袋の中だ。それが包装用のシートで巻かれて二枚目のビニール袋に入れられ口はテープで止めてある。ただ、厳重な割に素人梱包くさい。やっと新聞紙に巻かれた本体が現われた。形からして人形である。その人形が手を組んでいるのが分かった瞬間、〝まさか！〟背中に電流が走った。両腕に鳥肌が立った。頭部を巻いた白い包装紙と厚紙を急いで外した。〝間違いない〟1週間前（7月11日）に2階の展示ゾーン「坂本家の居間」の茶箪笥の上から姿を消した、龍馬人形ではないか。うれしさがこみ上げてきた。「帰ってきたぜよ！龍馬が！」大声になっていた。お掃除のおばさんが「持っていく時より、返す時の方が勇気がいるぞね。良かったねえ。館長さん！」。ずばり核心である。「龍馬ファンぞね、そう思う」とおばさんは満面の笑顔で続けた。その推測も鋭い。それに多くの一般の方が「よかったですね。待っていて」とわが事のように喜んでくださった。それがまたたまらなくうれしい。館の活力に繋がる。やっぱり龍馬は人気モンぜよ。

帰ってきた龍馬人形

異色の二人・龍馬と啄木　岩手で再会

四月中旬から七月中旬まで三ヶ月間開催した「龍馬と啄木展～明日の風景」は13万人余りの方にご覧いただき、無事終了しました。

そこで八月一日から舞台が変わり、岩手県盛岡市の石川啄木記念館で「啄木と龍馬展～二人の目線」が始まっています。オープニングセレモニーには達増拓也知事、谷藤裕明盛岡市長をはじめ四十人の参加があり、龍馬への歓迎ムードはなかなか熱いものでした。

同館は啄木の愛したふるさと盛岡市玉山区渋民にあります。今でも道の向こうから啄木が歩いてきてもおかしくない風情があり、地域では児童生徒をはじめ短歌づくりに熱心に取り組んでいるそうです。歌作りの中で啄木が人々に語りかけること、それは龍馬にもつながる明日へのメッセージだと思います。二人の風景が多くの心に感動を与えることを願っています。

（～十月十五日まで）

前田　由紀枝

初日に企画展を見て回る達増知事（右）や谷藤盛岡市長（中央）たち＝石川啄木記念館で

新たにスタッフ・渡辺瑠海さん

〝龍馬精神〟でアタック！

今年の龍馬記念館の状態は普通ではない。例年の3倍の入館者でにぎわっている。常設展示室などの展示ケースは1日で真っ黒になる。さらに来年は20周年の大事な節目の年を迎えるだけに、企画展の充実、イベント計画など職員は準備に追われている。そんな折、一人、心強いスタッフが加わった。エッセイストで龍馬記念館の現代龍馬学会理事にもなっていただいている渡辺　瑠海さん＝高知市＝である。

渡辺さんは「20周年に向けて押し寄せるイベント、記念誌、書籍の発行など龍馬好きの性格を生かして、現代龍馬学会の発信も心がけながらアタックしていきたいと思います。よろしくお願いいたします」と話している。

■「夏休みこども教室」

すべて手作りで子供も保護者も楽しむ

「夏休み子供教室」は、私が特に気合を入れている事業です。今年も５月頃より通常業務の合間で準備を進めてきました。用意をする資料、材料は、既存のセットに頼らず、ほとんど手作りで用意しました。例えば、作り方説明書はすべて手書き、船の展開図も自作。準備を行なう点で心がけたことは、とにかく数パターンの完成形、それにともなう材料を用意すること。できるだけ多くの選択肢を用意し、その中で、子供達に、自由に思い描いている完成に向けて作品を作ってほしいと願っています。何より教室で子供達の笑顔がはじけ、出来上がった完成作品を見るたびに、こちらにも充実感が伝わってきて、また次に喜んでもらえる教室を開きたいと感じるのです。子供と保護者の方が共に満足できる教室を目指していきたいと思っています。

山中　真優

子ども教室の定番として継続

今年も２回の夏休み子ども教室を開催しました。

ペーパークラフト教室では、龍馬の時代の帆船と現在の客船の２種類を用意、２つの船の違いについての説明を受けた後、制作開始！思い思いの色や模様で彩られた船の中には、客船の煙突の代わりに、カブトムシの角を付けた“カブトムシ号”も登場！

そして、紋切り灯り教室では、“紋切り”を和紙に貼り灯りを灯しました。紋切りは折り紙を３つ折りや５つ折にした状態に型紙をあてて切り、開いた時にどんな紋様ができるかを楽しみながらできる遊びです。はさみを使い始めたばかりの子どもさんでも簡単にできるものから、カッターを使用した細かい作業が必要なものまであり、子どもたちと親御さんが協力して仕上げていく様子もみられました。昨年の教室でも好評だった紋切り遊びは、今後も龍馬記念館の子ども教室の定番として継続していきたいと思います。

出来上がった作品を手にうれしそうに帰っていく子どもさんの顔や、「子どもよりも夢中になってしまいました」というお父さん、お母さんからの言葉もいただき、夏休みの楽しい思い出を作っていただけたことと思います。

尾﨑　由紀

〈次回子ども教室予定〉◎12月18日（土）9:30～11:30

「福を呼ぼう！福・福・福笑い」

■「女子美術大学と共にひと夏の思い出」

６月の海の見える・ぎゃらりいは、「第１回 女子美術大学同窓会 四国４支部巡回展」が開催され、いつもと一味違った小粋な雰囲気に包まれていました。３期に分けて展示した油彩、平面、彫塑、織りなど50点の作品は、いずれも個性ゆたかで、伸び伸びと自由な表現が評判でした。また、関連イベントワークショップでは「とびだす絵本」を作り親子で楽しみました。

８月には、高知の夏の象徴、“よさこい祭り”に女子美チームが初参加しました。“踊り子隊”は県内外の卒業生から現役生、教職員たち総勢60名です。スタートはここ坂本龍馬記念館からでした。館からは私ともう１人、女子美の卒業生山中が参加しました。

ひとりひとりがデザインの違った“かぶくゆかた”を身にまとい、真っ青な空の下、記念館と海をバックに艶姿を披露しました。“よさこい節”と鳴子の響く中、観客と踊り手が一体となって土佐の熱い夏を満喫できたひと時だったと思います。

“巡回展”の展示・搬入出、また“よさこい祭り”の準備では、高地支部の方々がそれぞれのジャンルで女子美パワーを発揮してくださり、まるで学生時代の良き時間が戻って来た様な感じさえしました。皆様お疲れ様でした。

中村　昌代

入館状況

2010年９月20日現在（開館以来6,840日）

◆総入館者数		2,776,988人
◆最多入館	(2010年５月２日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2010年度最多入館	(2010年５月２日)	6,686人
◆2010年度最少入館	(2010年４月８日)	442人

編集後記

龍馬記念館始まって以来の忙しい時期に当たった。夏休み、よさこい祭り、お盆、そして「龍馬伝」。新資料発見のおまけもついた。いやおまけではない“お宝”。しかも“日本のお宝”だからあわてた。８月は時間延長で閉館は午後７時。これも職員のプレッシャーとなった。副館長は連日警備員の補佐役で外に出て車の誘導、交通整理である。例年の３倍増しの入館者ペースだから、今年は年間40万人などという前代未聞の数字も冗談ではなくなってきている。秋の行楽期、お正月、来年は龍馬記念館開館20周年。息は抜けない（モ）

館だより“飛　騰”第75号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2010（平成22）年10月１日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者１名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手５枚をお送りください

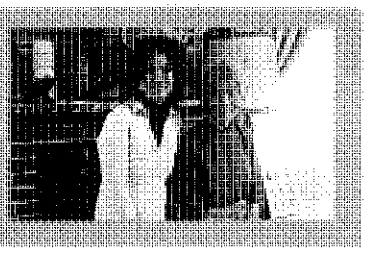
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

受け継いで、実践！

「まさしく“龍馬スピリッツ”」

渡辺 瑠海



最近、親による子供の虐待事件が後を絶たない。事件のニュースを聞くたび、私はいつもある方のことを思い出す。女性のためのDVシェルター運営の先駆けとなった故・武田紀（とし）さんだ。武田さんの”師匠“は児童養護に一生を捧げ「児童福祉の母」と呼ばれた「坂本龍馬の姪・岡上菊栄」である。2007年5月。初めて武田さんにお会いした。

「岡上菊栄の」バトン継いで

岡上菊栄は80歳まで児童福祉に命を注いだ。親に捨てられ、世間に見捨てられた子供たちを、貧しくとも愛情いっぱいに育て抜いた。武田さんは、菊栄さんと一緒に過ごした日々をまるで昨日のことのように思うと言う。

武田さんが菊栄のもとで児童養護に奔走したのは、昭和20年。彼女がまだ「子供との接し方」さえ知らない20歳の頃だった。た。さまざまな心の傷を抱えた子供たちを前に戸惑う武田さんに、菊栄は「これ遺言、これ遺言」と口癖を言いながら、人と人の平等な付き合い方を徹底して教え続けた。たとえ小さな豆粒ひとつでも、施設の子と我が子を分け隔てなく渡す。徹底した「平等」と「博愛」それが「岡上菊栄」の一貫した姿勢だったという。武田さんの表情はくったくない。心服した者の安心感とでも言うのだろうか。

菊栄のバトンを受けて武田さんは40数年博愛園の園長を務めた。そして平成元年、取り組んだのは、ただひたすらに弱者の命を救う、日本でも先駆けだった女性専用のDVシェルター「青涛の家」の活動だ。国や県、市などの補助を一切受けず開設、運営したのは、私利私欲のためではなくただひたすら傷ついた人をそっとかくまう「居場所」を作るためであった。「青涛の家」は赤岡カトリック教会の草花が咲き乱れる敷地の奥に、ひっそりと建っていた。武田さんは博愛園で40年を過ごした後、昭和42年。ベルギーから来た故レオナルド・シモンズ神父とともに、昼夜を問わず夫や恋人からの暴力（ドメスティックバイオレンス）で心身共に傷ついた女性を無条件に受け入れ続けた。

シモンズ神父と二人三脚

「真夜中に女性から二本の電話がかかってきました。”今から死のうと思い海にいるが、財布に、お守りがわりに『青涛の家』のことを書いた新聞の切り抜きを持っているのに気づいた。だから最後に電話をかけました“そのとき私も神父も、彼女が死のうとする寸前に、自分たちのことを思いだしてくれたことが本当にうれしかった」と武田さんは笑みを絶やさない。真夜中の二時近くに、武田さんと神父は車を飛ばして女性を迎えに行った。女性は救われた。シェルターで数日を過ごし、死ではなく、新しい人生の道に踏み出した。

誰であろうと助けを求められれば真夜中であろうと早朝であろうと助けに走る。俗世間を生きる私にとって武田さんはあまりにまぶしかった。そして、なぜ、そこまで他人のために利私欲を捨て、無償で人助けができるのか不思議でならなかった。その気持ちを率直にぶつけたら武田さんは微笑みながらこんな話をしてくれた。

人間つながりの原点は

シェルターに駆け込む人は一流大学を卒業して、キャリアウーマンで、社会のトップを歩いていたような人たちが、思いがけないことで挫折し、死を選ぼうとするケースが多いという。生真面目に社会と向き合い現実との段差に挫折する。拒食症、栄養失調になったり、孤立して引きこもってしまったり。武田さんと神父は、そんな彼女たちに居場所を与え、我が子のように撫でさすり、愛を与え続け、立ち直りを促した。

シモンズ神父の信念は「説教などしないこと。その人を大事にすること。食事はたっぷりと、食べたいものをいっしょにつくること」だったという。

「ここでは、言いたくないことは何も言わなくていい。名前も言いたくなければ偽名でいい。見てください、幼児はいつも10人以上、私の周囲につきまわって過ごしています。人間のつながりはこうした撫でさすり、スキンシップ、原始的なふれあいから始まる。挫折したときは、まずはそこから始めることです」。

シェルターに駆け込む女性たちの情報は外部に一切公開しなかった。警察に保護願いを出されると、再び被害者が無防備に外に出て行かねばならなくなる。そんな状況ではとても弱者が守りきれない。弱者の命を守りたいが一心の奉仕、そしてその活動への情熱が、はかりしれないほどの人の命を救ってきた。

「人生とは、心を縛る鎖を外す作業の繰り返しのようなものなのです」と武田さんは言う。執着のあるものを心からひとつひとつ外していかねばならない。つらい作業になることもある。しかし、それは必ず外れるもの。そのお手伝いができるなら幸せなことです

武田先生とご一緒した部屋は、質素で昔ながらの応接間だった。洗いたてのレースのカーテン。玄関には、ほうきと雑巾、ちりとりがそっと置いてあった。だが武田さんは「掃除機が大嫌いなんです」と言う。「今まで長い年月を大勢で楽しく暮らしてきましたが、そんな環境の中で自分自身本当は静けさを求めていたのかもしれませんね」その言葉に、ふと彼女自身の心に触れた気がした。

出会いの大切さ学ぶ

武田さんのしていたことは、今この世の中が最も必要としていることではなかったかと思う。武田さんが菊栄から受け継いだ平等精神、そして人間への深い愛情。シモンズ神父と共に守り抜いた弱者救出の精神。これはまさに「龍馬スピリッツ」の本流だと思う。武田さんの心に菊栄が生き続けたように、今、私の心には武田さんのこんな言葉がよみがえる。「人生は、どんな人と交わるかで全く違ってくるものです。だから、良い人に、たくさん出会いなさいよ。会えてよかった。今日はしあわせの日」

生きているというありがたさ。そして、出会いによって生き、活かされる人生があるということ。菊栄の意思を継ぎ、人の命を救い続けた武田紀さんは、この時代に重要な役割を担っていた方であった。この精神を私たちひとりひとりが引き継いで、実践し広げて行かねばならないと強く思う。

“話題人”インタビュー

「戦争は絶対いかんぜよ！」「子どもらに語り継ぐべし」
土佐弁交えて熱く語った2時間

岡田以蔵の子孫　岡田　義一さん

【インタビュアー】
前田　由紀枝・学芸主任

幕末、悲劇の刺客・岡田以蔵4代目のご子孫が高知にいる。岡田義一さん（84）＝香美郡土佐山田町＝。時代は違えども、義一さんもまた以蔵と同じく、壮絶な人生を走り抜けてきた“時代の証人”である。戦争体験を乗り越え、大病を克服した末に到った岡田さんの境地。その向こうに見えた「日本の未来」について語ってもらった。

岡田以蔵4代目の岡田義一さん。大正15年生まれの84歳。正確にいうと以蔵の実弟・啓吉の子孫である。岡田家初代、仁平が建てた代々の本家、岡田屋敷は義一さんの家のすぐ近くだ。

以蔵の母と妻のお墓は？

Q　以蔵の家は現在の高知病院＝高知市相生町＝辺りでしたね？

「そうです。あの辺にはほんの最近まで木流しがあったと祖父から聞いたもんです。一文橋のたもとは製材関係ばっかりやった記憶があります。そりゃあ盛況やったそうですよ。祖父は野菜を積んだ大車を大津の北浦あたりまで牽いて行って、そこから舟に積み込み商いをしよったそうです。江ノ口川の河口はちょうど物資の集積場で、買い取り宿も多かった。江戸時代から似た感じだったかもしれんですね」

Q　「以蔵の死」というのは残された家族にとってどんな影響を与えたのでしょう？

「以蔵の父親・義平は慶応元年50歳で亡くなっています。以蔵が慶応元年閏5月1日に首を斬られているので、親として実の息子の始末書を郷士に提出させられた。その心労でしょう。わずか1ヶ月後の6月7日に亡くなっています。以蔵の実弟・岡田啓吉は明治15年10月7日、39歳で。妻のハマは明治38年に28歳で亡くなっています。しかし不思議なことに義平も啓吉の墓も真宗寺山にあるのに、義平の妻（以蔵の母親）の墓が見つかりません」

運命の不思議さを実感

Q　以蔵の血を引く岡田さんの生い立ちに興味を覚えます。エピソードなど聞かせてください。

「私も以蔵も生まれ育ちは山田です。私はそりゃあ悪いことばっかりする落ちこぼれでした（笑）。学校らあ大嫌いで、旧高知商業を1年で退学して、大阪に出て丁稚でもやろうかと思いよったがです。けんど、その頃父が中国の新京で材木商をしていまして、母に「丁稚に行くならお父さんのところへ行きなさい」と言われて、新京に行くことにしました。現地の商業学校に入って、さて将来は何をやろうか考えて、よし“商業デザイナーになろう”と思ったのですよ（笑）」

「えっ！商業デザイナー」ですか？

予想外です。

「ハハハ、、学校の美術部に入って、デパートなんかの飾り付けの実習に行ってうれしかったがですよ。でも当時、男の憧れの職業はやはり飛行機乗りでした」

そうでしょう。

「こんな経験をしました。当時、満州関東軍の少年飛行兵の試験を受けに行く友人につきあって、飛行兵の試験についていったところが、友達は落ちて自分が受かったんです（笑）」合格したことは父には内緒でしたが16年5月には東京陸軍航空学校から入学通知が届いて、怒られると思ったけんど親父は怒らず、「学校なら行け」と言ってくれました。

しかし、その年の12月には太平洋戦争が始まって、入校したのは結局翌年。私は長男で、姉と妹が二人。親族会議で母が『長男は絶対に戦争にやらん』と怒りました。『うちは代々養子の家系じゃき戦争に行ったら死ぬき行かさん』と。しかし祖母が『そりゃあ本人の覚悟じゃき、行かせなさい』と言った。

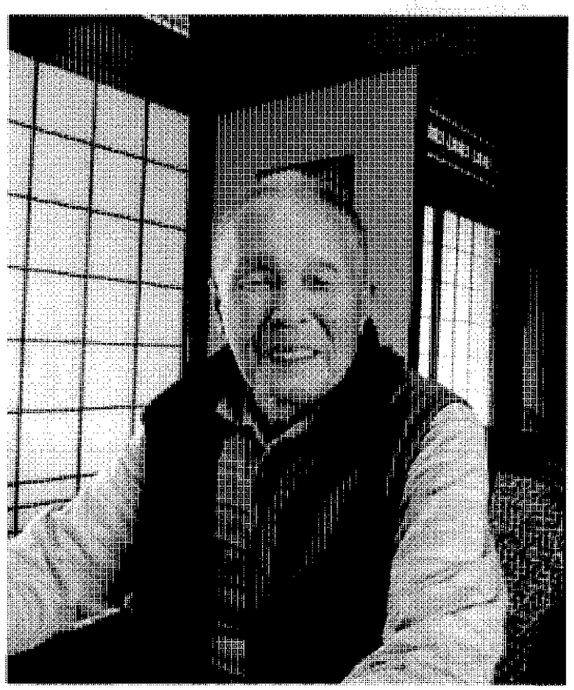
当時の陸軍学校は滋賀の大津と東京に分けて教育しよったんです。私たちは大津にある陸軍病院の兵舎で教育を受けました」

Q　陸軍学校の教育というとメディアの情報ぐらいの知識で、厳しさなど想像の世界ですが、実際体験されてどうでしたか？

「適性審査があってね。操縦は宇都宮、通信は水戸、整備は埼玉県の所沢に分かれて実地訓練に入るんですが、私は通信だったから水戸の陸軍航空通信学校に行きました。その後東京の市ケ谷、中尉とか大尉とか陸軍大将のいる作戦本部の通信部に配属されてびっくりしました。大きな世界地図を掲げた本部の司令室は今でも覚えてます。司令室というのは鉄筋でできた厚さが三メートルぐらいの壁が曲がりくねった先にある。これは爆風が来ても内部までなかなか届かない仕組みに作ってあるのですよ。

わしらは飛んでくるB－29を撃ち落す役目じゃ。一度に300機ぐらい飛んで来よった。爆発したら爆風よりも飛んでくる破片方が怖いんです。“サイパンからB－29が来る”という通信暗号を通信班で傍受して、暗号解読班が解読する。ツーツートンツーツーと毎日夜も昼もなく傍受に明け暮れました。もちろん日本の交信もアメリカには傍受されているので、その対策として乱数表というものがあってね、「114は上空」とかそういう信号に、毎日乱数表を足してから114を打つ。そういう風に撹乱して通信しています」

「その後、水戸の学校に戻り、後輩を教育する助教として残されて2期下の15期の生徒を教えていました。ところが助教の時間をさぼって煙草を吸っていたら将校にバレてしまい一週間の重営倉行き。夜中の十二時からいわゆる豚箱入り、以蔵が入った獄舎行きですよ（笑）。通達の紙が貼り出されて、私は今晩からそこに入ったら眠ることもできんろうと諦めて寝てました。他のもんはこっそり遊びに行ったのがバレて更に加罰2週間。わしゃ1週間でしたけど、とうとう豚箱というときに「第二十飛行集団に転属を命ずる」と通達が来ましたわけです。電車で現地、明野（あけの）＝三重県津市＝に向かいました。ところが途中、空襲に遭いで電車が止まった。結果、1日送れの目的地到着となったのです。飛行機は全部出た後でした。でもこれで命拾いしたんですよ。フィリピンのネグロス島に出て行ったこの戦隊は全滅でしたから。豚箱に入っていた同級生三人は命拾いした。人の運命の不思議さです」



Q　そしていよいよ“出陣”ですか？

「そう－ただ、学校を卒業し、兵役につく前に全員一週間休みをもらえるんです。そのときには先祖の墓参りと、親兄弟に別れをしてこいと言われました。当時はそれがめでたいことでしたからね。明野は軍神の木彫りの像の前で水杯で出陣して行った。

戦争に行くと決まれば出陣するまでは何をやってもいいんです。酒呑んで遊んでも自由。でも二日前には不思議と食欲がなくなってしまう。「く」になった特攻の友人たちは、離陸して敵地に突っ込むまでの二時間何を考えていたのかと未だに考えることがあります。遺書には日本の繁栄と、“長生きしてくれ”というそういうことを書いているが。皆17歳、18歳ですよ。日本の繁栄を祈って死んでいったわけですから、彼らの分までわしが長きをして、生きている限りは冥福を祈るのが役目だと思っています」

国を守ると言う意味

Q　殺伐の幕末と、混乱平成の現代を重ね合わせる見方があります。貴重な「戦争」を体験した世代として、今の世の中に対して思われること、感じることは？

「アメリカであろうが中国であろうが個人同士の恨みはない。戦争というのは結局“やられ損”。不運だということです。龍馬たちも二十歳そこらで勤王党に入って戦乱の時代を駆け抜けているが、志願して戦争に行ったわしらも、時代を生きた残党みたいなもんだと思うことがあります」

Q　幕末の人の気持ちが分かると？

「そうですね。おこがましいけんど、幕末の時代に生まれた人らあはスケールが小さいわね。なんせ土佐藩の戦いやきね。以蔵にしろ半平太にしろ、天誅をやったがは土佐藩のためなんです。しかしわしらは、日本のために全世界を相手に戦争になったがやき。第二次大戦ゆうたら全世界ぞね。その比較でゆうたら、幕末らあは、まっことほっそいわよ（笑）」

Q　幕末はスケールが小さいですか（笑）

「そうですよ。龍馬が土佐勤王党から出て以蔵を連れて千葉重太郎のところに行って、勝麟太郎を斬りに行って、いや待てよ、こりゃ違うぞと勝の弟子になって、海援隊をこしらえたという、その気持ちはようわかるがよ。なぜなら日本らあ今、見てみいや。丸腰じゃろう？。自衛隊があるというても、日本の国を守るのは国民の義務だと戦争を体験したわしらは思うのよ。憲法九条あるきゆうたち、そんなもんは無益なもんよ。三国同盟不可侵条約を結んでおきながら、攻め込まれて日本はいながらにして戦争でやられたがです。だから、以蔵に自分を重ね合わせるところもある。以蔵も龍馬も、純粋な気持ちで国を守らねばならんという気持ちだったんじゃないかとね」

たくましい国づくりが不可欠

Q　龍馬という人物について言えば？

「龍馬というのは、ありゃあ“要領のえい男”よ。暗殺されてなかったら、そこそこの要職についたろうと思うねぇ。以蔵も生きておったら、剣の達人、それこそ道場でも開いて何ぞやったりしたんじゃないろうかと思う。戦争でいろいろ見てくると、生き死には運命だと思うようになる。人間、生まれ落ちたときから運命づけられちよらね。航空母艦がやられて燃料が漏れだして、数分も経たないうちにその母艦近くの海に落下する。そんな悪条件の中でも救出される者もおる。近江屋での龍馬も慎太郎も以蔵も運命づけられちよったと思う。あの剣の達人が油断したがやろうかねえ。あそこにもし以蔵が同席しちよったら、龍馬も慎太郎も助かっつろうよ。龍馬が生きちよったら日本も変わっちよったろうにねえ」

Q　岡田さんは平和の尊さを現代に伝えるもう最後の世代ですね。

「わしらは「おまえの命は一銭五厘」と言われた世代です。一銭五厘というのは今でいう50円のハガキ一枚の値段。ハガキで徴兵されて当時の給料は4円。上等兵になって13円。当時コーヒー一杯が10銭の時代です。今の世の中、生活はようなった。金出せば食うものは何でもあるし、しかし自分さえよければいいという人間ばかりになった。昔は人と人がもっと助け合いよったもんじゃが、今はもうそんな人はおらんなってしまった。こんな田舎でも、隣は何をする人ぞ、です。

でも、こういう時代やからこそ、戦争というのはどういうもんか子供らあに話しちゃらないかんです。戦争はいかんぜよ。戦争ばあみじめなもんはない。平和がえいということを教えていかないかん。今の日本のこの平和も、アメリカの抑止力の上に成り立つ平和ですよ。抑止力が効かんかったら、そりゃすんぐに戦争に巻きこまれる。一発の弾で戦争が始まる。龍馬が言うたように、外国と対等に交渉できるたくましい国力を作らないかん時期ながじゃないでしょうか」

こぼれ話

―犬歩棒当記（三）―

寺田屋遭難の一件

―中井弘の書簡―

京都国立博物館　宮川禎一

筆者は千葉佐那の関係で宇和島にはご縁があるが、その宇和島藩に関わる話題をひとつ。

慶応二年一月二十三日深夜、龍馬は伏見の寺田屋で幕吏の襲撃を受けたが、その様子を記した書簡が宇和島にあるのだ。研究者はすでにご存知とは思うが、改めて紹介しよう。

手紙の日付は慶応二年二月三日なので事件の十日後。書いたのは薩摩脱藩で宇和島藩の情報係？であった中井弘（変名田中幸介）である。宛先は宇和島藩の家老松根図書。箇条書きの手紙の一部に寺田屋での事件が記されている。

「一、先廿三夜、於伏見船問屋寺田屋におひて土藩坂本龍馬並長人某県等一泊之処、伏水奉行林肥後守手ヨリ与力同心七八十人刀剣を以取圍ミ候所、坂本直ニ少茂不動、六眼銃を放ち掛、寄手少々退き候を見すまし、屋根を傳ふて逃去り申候。尤兼而良馬之婦人寺田やニ召置候を召連、三人共ニ行方不知相成候事。幕吏四五人即死。壱人龍馬と接戦いたし、良馬ニ手を負せ候付、御扶持米貳拾俵御褒美有之候事。

坂元行衛不相分、依而薩邸江潜居いいし候哉の風聞にて候。」

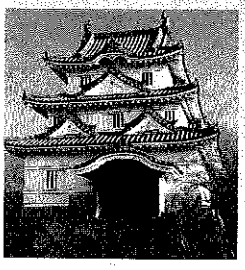
（出典は宇和島・吉田旧記第七輯『松根図書関係文書』平成十一年）

驚くほど詳細で正確な情報である。実に興味深く、考えるべき点の多い内容をもっている。

幕吏の死者が四五人であること。龍馬が長人（三吉慎蔵）と婦人（おりょう）と共に逃げたこと。龍馬に傷を負わせた幕吏に褒美が出たこと。薩摩藩邸潜伏のうわさ、などなど。

中井弘はどこで誰からこの事件の情報を聞いたのか？そしてなぜそれを宇和島に知らせたのか？この記述の前後には長州処分問題、二橋慶喜と幕府の確執、桂小五郎の入京、会津藩の動き、薩摩藩要人の動きなど、現在から見ても当時の京都情勢の重要な要素が漏らさず記載されているのだ。その中で寺田屋の一件がどうして報じられたのだろうか？あるいは中井は龍馬による薩長提携の動きをすでに承知の上で手紙に事件のことを盛り込んだのではなかろうか。

後藤象二郎と親交をむすび大政奉還を陰で支えた中井弘。維新史の名脇役である彼の情報通ぶりを示す貴重な手紙である。

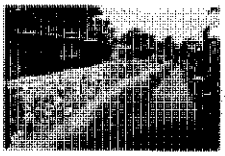


宇和島城天守閣

コラム・龍馬のこと

龍馬のルーツは

現代龍馬学会会員
江上　英治



幕末、急転する時代の流れの中を烈風のごとく駆け抜けた坂本龍馬。彼の思考は直線的な武士道でもない。彼の人間性はどこに由来したのだろうか。

9月1日、商用で京都へ赴いた。正午前、ぐんぐんと車の温度計は上がる。外を少し歩くだけでも大汗である。午後1時の気温は、なんと37度を示していた。

坂本家の先祖については様々な話がある。私は、友人を介して琵琶湖東岸の家紋の分布集計を依頼していた。さすがに東西流通の分岐点、多種多様の家紋が点在する。

そもそも家紋とは、平安中期以降、藤原一族を中心に家柄を重んじる風習から生まれた。徳川の平和な時代に至るや、従来の敵味方を明示する武具品、旗、幟、馬標などは必要がなくなり、おもに威儀を正す目的に用いられるようになった。

坂本家の家紋である『違枡桔梗紋』の違い枡は、二つの枡を組み合わせたものであり、近江、長浜地方にかけての造り酒屋にあるという。

翌朝長浜を出発し、県道2号線を近江八幡へと下っていく。途中、彦根城が山腹にみごとな景観をなしている。近江八幡へ着くやいなや、散策を開始した。町の保存について、町民がよく理解しているのがわかる。あまりの暑さに、うちわを片手に高台に登ってみた。なんと開けた町並みが碁盤の目ではないか。この時代は敵が攻め入るのを防ぐ為に迷路にするのが常套である。この近江の町は豊臣秀次が、安土からすぐの葦が生い茂る湿地帯に町を造ったといわれる。

秀次は天下人となった秀吉の後を継ぎ、より強大な国づくりのためにこの町を興したのではないだろうか。麓から観ると水路があり、溜池を通り、琵琶湖へと続いている。この町に理想の経済都市を造ろうとした秀次、そしてその意志を継いだ近江の商人たちは全国へ流れ、その商家の訓を伝えて行ったのではないだろうか。

『家督断絶は盗人の百倍の罪』という商家訓があるこの地方で大手を振って歩くことのできなくなった商家の一族が、一隻の舟に家財を積み、琵琶湖を抜けて淀川を通り、海を伝って土佐の地へやって来たとしても不思議ではない。

"話してみるかよ"

「海を見ろ」

現代龍馬学会会長
永国　淳哉

坂本龍馬記念館の駐車場の最上段に、本年4月「浦戸湾の碑」が除幕された。

そこには自然保護活動家の故山崎圭二先生の「ゆたかになること」の一節が刻まれている。龍馬の生家のある高知市上町に住まいされていた山崎先生は、「俺も、誰にも負けんばあ龍馬好きよ」と、いつも私が訪ねると龍馬談義をしていた。その日は、桂浜の龍馬像の話だった。

「本山白雲先生が原型を作り、龍馬の姪・春猪に見せたが、"目が気にいらん、龍馬さんは、もっと優しい男だった"と、何度か顔を作り直させた」という逸話から、話が飛んで"美人の条件と距離"というメモを書いてくれた。

「そのひと女を、美しいと思いました。けれども、彼女の顔も、虫めがねで見たら毛穴がありました。」

迫力満点の"龍馬大接近"。

桂浜のやぐらに上がれば、龍馬の"毛穴"でなく"耳穴"から"鼻穴"までカメラに収めている人がいる。NHK大河ドラマ「龍馬伝」で、"イメージ龍馬像"人気は週ごとに高まっている。子供でも「龍馬知っちゅうぜ」「龍馬の恋人も全部知っちゅう」と鼻高々。まさに国中、龍馬に"大接近"だ。

もし山崎先生がここに居たなら、こう言うのではないか。

「大いに接近しなさい。しかし、"毛穴"を見ても意味がないですよ。その面構えから腰の据わりよう、それに龍馬の目線、そうです"思い"に接近しましょう。あんまり近づきすぎると、ピントが合わなくなる。その時は、背景の海を見て調整しなさい。そう、海を見なさい。」

要は、人生自分の目線、哲学を持てという教えだと、肝に銘じている。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL(088)841-0001　FAX(088)841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp